

東日本地震津波被災地岩手県宮古市田老を訪ねる

2012. 8. 8 矢嶋

今年の3月、ある旅行冊子で、「被災地支援金つき復興応援ツアー」が催されるという記事が目にとまり、その中に、盛岡駅～龍泉洞～北山崎～田老～浄土ヶ浜～宮古駅～盛岡駅を巡る「龍泉洞・北部陸中海岸号」と名付けられた、昭和三陸津波（1933）後に10mの防潮堤が築かれたことで有名な田老で、今回の被災状況を現地で見学し地元のボランティアが当時の津波襲来の説明もしてくれるというバスツアーがあることが記されていた。

このルートは、いまから52年前の昭和35年5月のチリ地震津波が襲来した年の夏、大学のクラスメイト15人が、教官に引率されて野外実習で一巡りした北部三陸の一部と重なる地域である。皆でまた訪れてみたい思いに駆られ、何人かの級友にメールを送ると、すぐに「是非行きたい」という声が返ってきて、前記のバスツアーを主軸とした旅行をクラス会として行うことにした。各人の都合の最大公約数をとって、8/5～7の2泊3日で計画した。

8月5日夕刻、大阪、名古屋、東京、秋田から8人が盛岡駅に集合。ちなみに15人の級友のうち、既に3人が幽明界を異にし、一人は卒業以来一度も顔を見せず、10年程前、わたしがレッドカードを切って除名、二人はめったに出てこない、もう一人は配偶者既に無く母親介護で出歩き不可ということでいつものメンバーの8人となった次第である。



初日は、盛岡市郊外の御所ダム湖畔の”つなぎ温泉”泊。

翌日、ツアーバスが宿まで来てくれ、更に盛岡駅でも参加者をピックアップして前記の観光と被災地見学を織り交ぜた日帰りバスツアーが始まる。

日本のチベットと呼ばれ、今でも山深い北上山地を横断する小本街道(国道455号)を岩泉町経由で北部陸中海岸へ。

途中、私の勤務した会社が施工し、先輩達から冬季の厳しい環境での苦労話をよく聞かされた岩洞ダムを瞥見し、最初に着いたのが日本三大鍾乳洞の一つといわれる「龍泉洞」。足の具合の悪い私と、N君は往復1時間ほどの地底、湖までで引き返して、昼食休憩。

小本街道を更に東へ進み、途中から県道44号に入り田野畑村に入り、三陸海岸の名勝「北山崎」を目指す。途中、前後がぶっちぎられた高架橋の上に車両1台が取り残されたままになっている三陸鉄道北リアス線、防潮堤が破壊された田野畑漁港、3階まで津波に直撃され現在復旧工事中の羅賀ホテル、一本だけ残した松林などをバスの窓外に見ながら「北山崎」着。ここも陸中海岸の有名な景勝地では在るが、雨模様の曇天で、展望台から微かにリアス式海岸の絶壁が望まれるだけ。



破壊された防潮堤（田野畑漁港）

田野畑村は、盛岡方面からは北上山地に遮られ、海岸線に沿って、北方は久慈市、南方は宮古市の間に挟まれた僻地で、震災当時は、交通が遮断されてしまいボランティアの支援が一切無く、復興作業は総て地元でやらざるを得なかった地だといわれている。私たちの出来ることは、海産物などをお土産に買い求め、いくらかでも地元経済が回転するよう手助けすることしかない。「北山崎」のみやげ物店で、参加者それぞれがそれ

ぞれにみあった品物を買いもとめる。



一本だけ残った松の木，以前は松林に遮られて，ここから海や防潮堤は見えなかったという。

さて次に向かったのは，田老町，今は宮古市田老となっている。

三陸海岸を南北に縦断する国道45号線を南下。自動車専用道路の三陸北道路を飛ばして，小本から一般道へ，52年前は，くねくねと登り降りを繰り返す一車線未舗装だったと記憶している徒歩とバスを乗り継いで南へ向かった砂利道は，今や改良されて快適な道路に変身し，30分ほどで田老へ到着。

防潮堤の下で二人のボランティアガイドさんが待っていてくれた，時刻は既に17時近く，すぐに防潮堤に上がり，津波襲来時の様子，避難の有様，復興作業の現況などの説明を聞く。



破壊された第二防潮堤（田老漁港）

昭和三陸津波の後に築かれ，チリ地震津波ではその効果をよく発揮した防潮堤（第一

防潮堤と呼ばれている。52年前に、高さ10m延長1350mのこの巨大な防潮堤に度肝を抜かれこれならどんな津波が来ても大丈夫だと感心したことを記憶している)は、今回の津波では殆ど壊れていないが、チリ地震津波の後に更に海側に築かれた第2、第3防潮堤（s37～s53にかけて建設、三つの防潮堤を上から見るとあわせてX型となる特異な配置になっている）は、完全に破壊されている。津波は第2、第3防潮堤を破壊して、第1防潮堤を乗り越え、いわゆる堤内地で渦を巻き、住宅をごっそり破壊して166人の命とともに持ち去ったという。ちなみに第1防潮堤は、内務省の設計施工、第2、3防潮堤は運輸省の設計施工、両者の設計思想の違いが、今回津波に対する挙動の差となって現れたのかもしれない。



第1防潮堤の内側、住宅地が流失し、ぺんぺん草の間から土台コンクリートだけが見える。左上の白い建物は、田老第一中学校。当初、生徒達は屋上に避難したが、津波襲来直前に左上の丘に駆け上がり難を逃れたという。左手の高台には、昭和三陸津波後に高台移転した30戸ほどの家屋が建つ。

海岸線近くでは、テトラポッドの製作ヤードが設けられ、少し沖合いに多分波消しブロックとして仮の防波堤の役割をさせて、漁港機能を回復させようとしているらしい工事が行われている。高台移転の候補地はあるものの、遺跡調査や、営林署関連の許可書類手続きなど幾つもの障害があり、早くても工事着手までには4年以上もかかりそうで、若い人たちは、あきらめて宮古市へどんどん移住を始めているという。従来から高台に居を構えて今回の津波を免れた30戸ほどの住宅以外は、再建の様子は全く見ることが出来ない。

今回の死者・行方不明者数は、明治三陸津波（明治 29.6.15）と昭和三陸津波（昭和 8.3.31）のそれを大幅に下回っているものの、防潮堤の効果を過信して逃げ遅れた傾

向があり高台移転とともに今後の課題だという。



第一防潮堤の海側，第二防潮堤が出来る以前は，砂浜であったが，三陸鉄道トンネル掘削屑などで埋め立てられて，いつの間にか住宅地となり今回の津波で完全に流失。左奥の建物，「田老観光ホテル」は，3階まで完全に破壊された。右手奥では消波ブロックの製作と設置作業が行われていた。

当人も被災者であるボランティアの方たちに「これからも頑張っね〜」と声を掛けて田老防潮堤を後にする。

津波の被害は，遅々としたペースではあるが，少しずつ回復していくと思われるが，いっぽう，放射能汚染に見舞われた原発事故被害地のことを思うと暗澹たる想いに駆られながら，田老ほどではないが，やはりあちこちに津波の爪あとが残る宮古港を半周しながら最後の観光地，暮れなずむ「浄土ヶ浜」へ。

ここも津波の襲来を受け，岩山を覆っていた松ノ木が心なしか少なくなっているように見える，また海岸に建つ復旧されたレストハウスの屋根・壁面や入り江奥の山腹斜面に切り倒された樹木や切り株に被害の跡が認められる。

二日目の宿は，浄土ヶ浜近くの「浄土ヶ浜パークホテル」，高台に建っているので津波の被害は無かったものの地震で相応の被害を受けたり，アクセス道路が確保できなかったり，ホテル営業上の環境が整なわったりしたのか，震災から一年を経た今年3月8日からようやくリニューアルオープンしたばかりである。

年金生活者ばかりのクラス会としてはちょっと豪勢過ぎる宿ではあったが，今回旅行の最後の一夜は，半世紀も前の昔話に花が咲き楽しい時間を過ごすことが出来た。

翌朝，JR 山田線の快速リアスに乗車し，急峻な山が迫る谷間を縫って北上山地を横断，2時間ほどで盛岡駅へ。52年前は蒸気機関車，トンネルに出入りするたびに窓を

閉めたり明けたりしながら4時間くらいはかかったのだろうか？

皆で盛岡名物”冷麵”を食して解散。